

聖書：第二サムエル記 15章 13～23節

説教：弱くなっていく王

1 ダビデ

1) アブシャロムの企て

ダビデの三男アブシャロムは、あるとき自分の兄であるアムノンを殺し、そのことで一旦は王子としての権利を剥奪されてしまいます。しかしそれから二年たったとき、ダビデの側近ヨアブの畑に火をつけるという強引な方法を使って王子の地位に返り咲いていきます。

アブシャロムには、父ダビデを倒して自分がイスラエルの王となるという野望があります。その野望を実現するために、四年という時間をかけ、軍隊をひそかに準備し、イスラエルの人々には自分がいかに有能であり、また王としてふさわしい人物であるのかを言い広めていきます。もしもこのとき世論調査を行ったなら、ダビデの支持率はじりじりと低くなり、代わってアブシャロム支持率がどんどん伸びていったことでしょう。アブシャロムはこのチャンスを見逃しません。すぐさまヘブロンに向かいます。父ダビデがかつてイスラエル王の即位式をおこなった町、そこで自分こそイスラエル王であると宣言いたします。

2) 実の息子にいのちを狙われる

この知らせを聞いたダビデはすぐにエルサレムからの脱出を決断します。それまで何の準備もしていません。それどころか、自分の右腕であり参謀でもあったアヒトフェルがアブシャロムの側に寝返ってしまいました。アブシャロムの軍隊を迎え撃つ備えどこ

ろではない。逃げるしか手はありません。親しい人と別れの挨拶をする暇もありません。食事をして皿をかたづけろ余裕もないほどの慌ただしい出発です。

かつてダビデがまだ若かった頃、理不尽な理由によってサウルからいのちを狙われ、逃亡生活を強いられていたときがありました。それはそれでつらい経験でしたが、今度は自分の血のつながった息子からいのちを狙われているのです。息子に裏切られたという思いがダビデの心を苦しめていきます。

3) どちらの側につくのか

ダビデの苦しみはそれだけではありません。ダビデの家来たちのことがあります。アブシャロムが新しいイスラエル王であると名乗りを上げたということは、ダビデの家来たちの耳にもすぐに入ります。みなさんがダビデの家来だったとしたらどうしますか。いろいろなことを考えるはずですが、ダビデという沈没しかけていている船に留まるのか。それとも、まだ経験はないけれど真新しくて勢いのあるアブシャロムという船に乗り替えるのか。自分にとってどちらの船に乗るのが安全か。心の中で計算するでしょう。

ダビデの家来たちはどんな反応をしたか。15節。「王の家来たちは王に言った。「私たち、あなたの家来どもは、王さまの選ばれるままにいたします。」」これを読むと、ダビデの家来全員がダビデに忠誠を誓ったかに見える。しかし詩篇3篇を見るとちょっと違う表現になっています。この詩篇は「ダビデ

がその子アブシャロムからののがれたときの賛歌」とあり、その 1, 2 節にはこうです。

「主よ。何と私の敵がふえてきたことでしよう。私に立ち向かう者が多くいます。多くの者が私のたましいのことを言っています。

「彼に神の救いはない」と。」

平和なときは何も見えません。けれどもいざ自分が王の座から転げ落ち、財産を失い、夜逃げ同然のみじめな姿になっていくと、人の心の中にあることが明らかになっていきます。きのうまでは親友だと思っていたのに、きょうになったら急に手のひらを返すようによそよそしい態度に豹変し、まるで他人事のように冷たくこう言うのです。「彼に神の救いはない。」ダビデの家来たち、なかには忠誠を誓った者もいました。しかし、詩篇 3 篇を読むとアブシャロムの側に寝返り、ダビデの敵となった家来たちがかなりあったことが伺えます。

2 ガテ人イタイ

1) かつてダビデが逃げ込んだ町ガテ

ではどのような者たちが、ダビデのところに留まったのか。その名前が 18 節にあって、ケレテ人、ペレテ人、ガテ人とあります。あまりなじみのない名前ですが、いずれもイスラエル人ではなく外国人です。皮肉なことで、ダビデが窮地に立たされるとき、そばに残って忠誠を誓ったのが在留異国人であったというのです。普通は在留異国人のほうがさっさと主人を捨てて敵に寝返るのではないかと思うのですが、そうではなかった。どうしてか。

19 節以降に、ダビデとガテ人イタイとのやりとりが記されています。そこにヒントがあります。イタイは大ぜいの家族を連れて、

つい最近ダビデのところにやって来たばかりでした。それがたまたま今回の事件に巻き込まれてしまい、ダビデと一緒に逃げる羽目になってしまいます。ダビデはそのことを心苦しく感じ、「自分と一緒に逃げなくて良い、エルサレムに留まっていなさい」とねんごろに勧めます。ダビデはイタイのことを亡命者と呼んでいるので、イタイはガテという地域からわざわざダビデを頼って逃げてきたようです。外国人のイタイがダビデのことを頼って来たのはどうしてか。

ダビデがまだ若くてサウルからいのちを狙われて逃げていたときのことで、サウルの取り締まりが厳しくなり、イスラエルの国中にダビデの居場所を知らせた者に報奨金を出すというおふれが出されました。こうなるとイスラエルには隠れるところがありません。そこでどうしたか。まるでスパイ映画のような筋立てですが、ダビデは敵であったペリシテ人のところに身分を隠して飛び込んでいくのです。それがガテという町でした。敵の町ですから、ダビデは身を低くしなければ生き延びることができません。大変な苦勞をします。けれどもいっぽうでダビデの信仰とその人柄を慕って、ダビデの周りにはいつの間にか多くの人が集まっていきます。そのひとりがイタイでした。あれからもう何十年もたっているのですが、イタイはダビデのことを覚えていて、自分が窮地に立たされたときにダビデを頼って亡命してきました。

2) 「生きるためでも、死ぬためでも」

そのイタイがダビデにこう言います。21 節。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためでも、死ぬためでも、しもべは必ず、そ

ここにいます。」

イタイはどうしてここまでダビデに忠誠を誓うのでしょうか。それもつい数日前にダビデのところに込んできたばかりです。子どもを含めた一家とその家来たち六百人を引き連れています。自分一人のことならどうしてもよいかもかもしれませんが、一族の運命がかかっています。どうしてそこまでイタイはダビデに忠誠を誓おうとするのか。

それはイタイの置かれている状況と関係しています。彼は自分の国を追われ、家族や家来を連れて外国の地に亡命してきました。つい昨日まで、自分もダビデと同じようにいのちを狙われていたのです。だからダビデの気持ちがよくわかります。ダビデの苦しみは自分の苦しみのように感じられます。とても他人ごとには思えません。ダビデは、自分が困っているときに、外国人であるのにも関わらず快く迎えてくれました。自分がガテの町でどれほど苦労したかも親身になって来てくれた。そして、「もう安心しなさい。ゆっくりここで休みなさい。ここにいれば大丈夫だから」と、いろいろな犠牲を払ってくれたのです。そのことを忘れ、ダビデが困っているのを見捨てて自分たちは関係ないと、とても言えない。自分たちはダビデと行動を共にすると決断していきます。

ここに記されている他の外国人たちも、イタイと似たような事情であったのだろうと推測されます。

3 弱くなるダビデに主がおられる

1) イタイが見ているもの

イタイの決断を皆さんはどう思われるでしょうか。ダビデはこれから先どうなるかわかりません。エルサレムに戻れる保証はなに

もありません。いや、今の情勢から判断するなら、ダビデはアブシャロムに殺される確率が高い。もしそうなればダビデの側についていたものは全員処刑されるでしょう。イタイひとりが、「自分は死んでもいいからダビデについて行く」と言うのは格好がよいのですが、全員巻き添えになる可能性があるのです。冷静に考えたら批判を浴びるような話です。ダビデが「あなたの同胞を連れて戻りなさい」と言うのはもつともです。でもイタイの決意は揺るぎません。

イタイの判断が正しかったことは、このあと明らかになっていきます。しかしそれは後になってから言えることで、イタイは常識から見れば批判されるような判断をしたことには変わりありません。イタイが愚かであったのではありません。彼は後にイスラエル軍のリーダーに任命されるほどの聡明な人です。ということは、イタイは常識という判断基準ではなく別のものを見ていて、そこに真実があると信じて判断したことになります。いったい何を見たのでしょうか。イタイのことばの中にあります。21節。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。」

イタイはイスラエル人ではありません。けれども主に誓っています。彼は信仰者です。都から追われ、弱くなっていく王ダビデなのに、ダビデの側に主がおられるのを見逃しません。イタイは目に見えないものを見分ける霊的な洞察力をもっています。

それだけではない。ダビデにつけば、自分が死ぬ、いや一緒についてきた同胞たちも道連れになって死ぬ可能性があります。自分は死ぬかもしれないけれども、主の側につくことはそれよりももっと大切なことと考えます。なぜそこまで考えるのでしょうか。

2) 真実を見る

本当のいのちはどこにあるのかです。アブシャロムにつくなら、少しは生き延びられるかもしれません。実際、そのように判断した者が多く出ました。けれども、アブシャロムには真実がありません。力があり勢いはあるように見えるのですが、真実がないところにはいのちもない。本当のいのちがないのなら、自分の人生を賭けるべきではありません。

一方ダビデはどうか。力がありません。見栄えもありません。老人です。有力な参謀は敵に寝返りました。地位も財産も失いかけています。けれども、ダビデはどんな信仰をもっていたか。ダビデと話をしたときにいろいろなことを聞きました。ダビデはこう言っていました。「自分は、アブシャロムを正しく指導できなかった。その責任は自分にある。アブシャロムの罪は自分の罪である。」そう告白するのを聞いていました。それを聞いたとき、イタイはダビデの側に真実があるとわかりました。真実があるところに主がおられるのです。たとえ敵に殺されるようなことになっても、救いは主にあると信じていきます。

私たちはどうでしょうか。何を見ているでしょう。自分は多くの敵に囲まれて、自分の味方になる者はだれもいない、と嘆くときがあるかもしれません。でも、もし私たちが真実から目をそらさずに、自分に罪があつただと告白するなら、主は必ず私たちのそばにおられると言うのです。自分は弱いと思っ
ていても、あるときイタイのような人が現れ、私たちのなかに主がおられると告白していく、というのです。力強い味方です。神の励ましはこのようにして与えられていきます。